

南太平洋の諷刺文学

—エペリ・ハウオファの『尻に接吻』を中心に—

安 川 昱

The Art of Fiction of Epeli Hau'ofa in his *Kisses in the Nederends*

Akira Yasukawa

The subject of this novel of improbabilities is the arse, the seat of the last great taboo in the civilised society. Oilei Bomboki, the protagonist of the novel, who is an important citizen of a small island country in the South Pacific, wakes one morning with an excruciating pain in his anus. Bomboki anxiously searches for a cure, goes through a series of unsuccessful treatments at the hands of various healers and doctors, culminating in a bizarre operation, and eventually seeks the help of Babu Vivekanand, the yogi, sage and conman. The whole novel is the metaphor and comments on the pain created in the Pacific by colonialism and neo-colonialism. It is constructed as an uncouth parody of the philosophical idea of “What we call the beginning is often the end/And to make an end is to make a beginning/The end is where we start from…” of T. S. Eliot. Bomboki has given himself that licence of the clown in the South Pacific; he farts freely, swears, and uses every bad language, but he really is looking for the renewal of humanity. *Kisses* is a new kind of satire—a satire of the clown.

I

トンガ人の宣教師の両親のもとに、1939年パプアニューギニアで生まれたエペリ・ハウオファ (Epeli Hau'ofa) は、これまでに小説を2冊出版している。第一作『タイコ島人の物語』 (*Tales of the Tikongs*, 1983) は、まるで道化の演技を彷彿させる、軽やかな洗練された文体と、絶妙な表現を駆使して、南太平洋の小さな島の、独立国家となっても植民地根性の抜けない住民

の弱さや奇行を、そして、まるで体を成さない政治と、旧宗主国やその他の援助国まかせの経済の実情などを、面白おかしく小説仕立てで語り聞かせるものであったが¹⁾、第二作『尻に接吻』(*Kisses in the Nederends*, Penguin Books 1987) は、実に人を喰った話であるが、実際、当人にとっては深刻な事態なのに、おかしくて大笑いせずにはいられない痔の苦痛とその治療をめぐる奇想天外な話である。

タイトルの“Nederends”は、オランダなどの低地国を想わせる大袈裟な表現をしているが、それを解けば「下の端」の意で、要するに肛門のことである。そこで、この小説の表題 *Kisses in the Nederends* を、とりあえず『尻に接吻』と訳した次第である。

話は、作者自身が体験した痔の苦痛とその治療をめぐる数々のトラブルを、旧植民地国家の政体や社会のもつ矛盾と腐敗の寓意として描き出している。ハウオファの世界には、およそ常軌を逸した者ばかりが住んでいる。西洋医術による手術が失敗に終わりそうに思われたとき、ヨガ式まじない師の一団が現われ、剝離して飛び出しそうになる移植された皮膚を、まじない師たちが順番に肛門に接吻して押え込んでしまうのである。

Talanoa 選書の一冊として、1995年にハワイ大学出版部から再版された版の裏表紙に、

In the best Rabelaisian tradition, *Kisses in the Nederends* weaves a tale of improbabilities around the seat of the last great taboo. Oilei Bomboki wakes one morning with an excruciating pain that sends him anxiously searching for a cure. Unsuccessful treatments at the hands of various healers and doctors, culminating in a bizarre operation, lead the desperate Oilei to seek the help of Babu Vivekanand—sage, yogi, and conman. Through Babu's teachings Oilei learns to love and respect the source of his own (and, ultimately, everyone's) complaint. By turns savage and absurdly comic, this brilliant satire allows Hau'ofa to comment on aspects of life in a small Pacific community perched precariously between traditional and modern ways.

と内容を紹介しているが、この小説が、良くラブレーの伝統を受け継ぐものである、という評者の見解に対して私に異論はないが、そもそも英文学には長い風刺文学の伝統があり、ハウ・オファは、英文学の伝統を受け継いで、新しい英語風刺文学創造の最前線に立つ作家の一人である。

英文学には、古くはチョーサーから、ルネサンス期のトマス・モア、エリザベス朝のシェイクスピア、そして、18世紀には風刺文学の黄金時代を迎え、アレクサンダー・ポープやジョン

ソン博士の風刺詩、ヘンリー・フィールデング、ジョナサン・スウィフト、ローレンス・スターン等の風刺小説がある。ヴィクトリア朝の風刺作家の代表は『不思議の国のアリス』の作者ルイス・キャロルである。20世紀にはさまざまな詩人や作家がいるが、エペリ・ハウオファはT.S.エリオットをもっとも重要な風刺詩人と認めていることが推察できる。

しかし、ハウ・オファの文学には、英文学の風刺文学の枠組みを越えた独自のものがある。英文学の小説作法によりながら、ハウ・オファの諷刺の在り様は南太平洋の道化に特有のものである。

ハワイ大学出版部版の編者 Vilsoni Hereniko は、この小説は意気地のない人には向かない。余りにも「生ま生ましい」のを不快に思う人もあろうし、傷つく人もいるだろう。そもそも始めから終わりまで肛門の話だなんて。しかし、我慢して読み進めば、『尻に接吻』は、伝統と近代化、自立、帝国主義と搾取といった現在の太平洋諸国の直面している問題の複雑さについて重要なことを語っていることに気付くだろう、と言う²⁾。

道化の真骨頂は、己れは常に冷静で、どのような深刻な事態をも笑い飛ばし、人々に平衡感覚を取り戻させることである。道化は世界中すべての文化に存在するが、南太平洋の島々には、昔から演技としての道化が社会に浸透している。そして、道化の演技には、タブーを破ることが許されるのである。

By daring to dance in the “middle of our zones of taboo,” Hau’ofa has written a novel that is reminiscent of the so-called licentious dances that came under heavy censure by early missionaries in the Pacific. Like these ancestral dances of unbounded joy that celebrated pleasure and desire, this novel portrays a way of being and talking that many Pacific Islanders will recognize as part of our identity as peoples of the land and sea. The difference is that Hau’ofa has revealed a sensibility and behavior that is usually appreciated and enjoyed by islanders only when they are among themselves.³⁾

ハウ・オファは、南太平洋の人々の中で認められる道化の自由を最大限に活用して、人間の愚かな考えや行動を、肉体的な弱点を、あきれるような性癖を、遠慮なく、露骨に、時には露悪的に暴き出すのである。道化のように、ハウ・オファの風刺は滑稽によって救われている。

II

『尻に接吻』の荒筋は次の通りである。

トンガ王国を暗示するような、架空の、南太平洋の小さな島嶼国の一つティポタ (Tipota) 国のコロダム (Korodamu) 村に住む名士オイレイ・ボムボキ (Oilei Bomboki) が、ある朝 6時に目を醒まし、それまで押えていた尻が出て、まるで単車のエンジンを始動するようなバリバリという爆発音に驚く。横に寝ていた妻のマカリタ (Makarita) は悪臭を避けるためシーツを引張って顔を覆った。二度目の破裂音で二人はそれぞれ床を離れるが、マカリタに先を越されトイレットを占領されて、やむを得ず芝生の庭に小便をして台所まで戻ってきたとき、オイレイははじめて肛門に痛みを感じた。自然のお呼びだと思ったオイレイはトイレットに行き、大量の大便を排出したが、痛みは消えなかった。それで、彼はもう一度気張ってみた。すると、まるで、火の塊が尻から脳天めがけて、真直ぐ駆け昇るような激痛に襲われ、頭がくらくらとした。両手を拡げて狭いトイレットの壁を押え、かろうじて身体を支えることができた。ゆっくり居間まで歩いて行って、そこの長椅子に腹這いになって横たわり、マカリタにお湯とタオルを持ってきてくれと哀願する。

マカリタがオイレイに股を拡げさせ、下にお湯のはいった洗面器を置き、肛門を洗うためにウォッシュを当てがったところ、オイレイが本能的に尻を持ち上げたために、肛門が的にもマカリタの顔に当たり、おまけに、そのはずみに出た尻が彼女を直撃した。怒ったマカリタは洗面器のお湯をオイレイのお尻にぶかけると、悲鳴をあげて、長椅子からころげ落ち、床に横たわってうめいているオイレイを見捨て家出し、同じ村のはずれに在る母親メア (Mere) の家に行き、もう我慢ができない、と訴える。

他方、オイレイの家では、もたえ苦しむ彼を巡査のブタコ (Butako) が診療所へ連れて行き、総合病院のメイト (Tauri Mate) 医師を急救車で連れてきて診察させる。メイト医師は、お湯がかかって飛び上ったのは無理のないことだけれど、余り熱くなくて幸いだった。敏感なところだから。火傷は問題はない。入院の必要もない。しかし、本当に痛むらしい。何か他に原因がありそうだと、言う。そして、とりあえずと、有効期限を過ぎている (といってもこの国では入手しようがないのである) 痛み止めをオイレイに与えた。

オイレイが急救車で家に帰ると、母親に付き添われてマカリタが戻っていた。そして、噂を聞いて駆けつけたマラマ・カカセ (Marama Kakase) も来ていた。背が低く、太った老女のマラマはマカリタの実家の隣に住む名声の高い治療者 (healer) であった。かくして、押し付けてきたマラマがオイレイがかかわる最初の民間療法の施療者となる。彼女の患者の病気と患部を知る方法は、彼女がある種の薬草によって催眠状態に陥り、その状態にある彼女の身体に患者の病状が再現されることによって明らかとなるという奇想天外なものである。

マラマは、ハンドバッグから小さな薬草を巻いたものとチリーを三個としようがを一切れ取

り出し、先ず巻いた葉とチリーを口に入れよく噛んでから注意深く飲み込み、それからしょうがを食べた。彼女はすぐ眼を閉じ、床の上に両手両足を広げて身体を伸ばし、眠ってしまう。皆んなが見守るうちに、マラマは大きないびきをし、それから突然まるで機関銃の一斉射撃のような屁をこき始めて皆を驚かす。そして部屋は悪臭が立ちこめる。マラマは、目を醒して、何が起ったかと尋ね、いびきはマカリタの、屁はオイレイの症状を表わしている、という。オイレイの激痛の原因はおならのしすぎだ、そして、腎石のような石が肛門に詰まっているのだ、という診断を下す。マラマはそれらの石を下ろす処方として、彼女自身が使ったのと同じような巻いた葉などを与え、オイレイの反応はテープに録音しておくように指示する。肛門の石が下り、痛みが止まる筈である。

マカリタはよろこんで夫に薬剤を与え、彼が眠っていて放つ屁を録音するのであるが、石は全く排出されず、彼女はがっかりする。

薬を続けて服用することを禁じたマラマは、しばらく考えて、ロサナ・トノカ (Losana Tono-ka) を紹介する、という。ロサナは、薬剤は用いず、祈り、患部に手を当てるだけで治療する信仰治療者 (faith-healer) である。彼女は平和部隊のボランティアをはじめ、すでに多くの患者を治療しているが、彼女はマラマより 25 才も歳下で、鷹のような顔に鉤鼻をもった、背が高く、やせぎすの元気な治療者である。マラマは、首都のクルティ (Kuruti) で開催される国際会議に自分もロサナも出席するので会議が終わったら彼女を連れてくる、という。

この会議は「第 1 回近代医学と伝統的医学の相互理解と協力増進のための国際会議」(The First International Conference on the Promotion of Understanding and Co-operation Between Modern and Traditional Sciences of Medicine) というもので、ティポタ国政府と世界保健委員会 (World Health Commission 略号 WHC。国連の WHO の振りである) と第 3 千年期財団 (The Third Millenium Foundation) の共催により、クルティで 4 日間開催され、世界中から 2 千人以上の医者、精神分析医、薬剤師、信仰治療者、シャーマン、薬草治療者、産婆、マッサージ師、魔法使い、鍼師、クリスチャン・サイエンスの信奉者、心理学者、人類学者、社会学者がこれに参加したのである。しかし、アメリカ代表はいなかった。アメリカ合衆国は、本会議が、アメリカの製薬産業を破壊しようとする共産党シンパの陰謀に加担している、アメリカ国内で危険だからと販売禁止になった医薬品を第三世界に送り込んでいるという全く根拠のない非難を行っている、として代表を送ることを拒否したのである。

国際会議は、開会式にティポタ国政府を代表して挨拶に立った保健大臣カティ・カニカニ博士 (Dr Kati Kanikani) の、「近代医学と伝統的医学が連合し、聖なる結婚の喜びによって結ばれる、人類史上における新しい時代の誕生に私たちはこの会場で立ち会うのです。云々」と

結ばれた名演説を行って、参会者全員大変感銘を受けたのであるが、民間の治療者たちは、自分達の営為がこのような公認されたことに感動し、誇らしい気持ちになった。

会期中に親しくなった英国人医師ジェイムズ・ハミルトン博士が、信仰治療者が患者を治療するのを見学したいというので、彼と通訳の役を申し出たメイト医師とロサナを連れて、マラマがコロダム村に帰ってきて、オイレイを訪ねる。

メイト医師の痛み止めの薬は全く効きめがなく、四六時中苦痛にさいなまれ、今ではベッドを離れることができないオイレイではあるが、病院に行くのをかたくなに拒んでいるのは、病院の看護婦の殆んどが彼の敵の娘か親族だからであった。マカリタからロサナのことを聞いたオイレイは最初嫌がったが、病院に行くよりむしろと承知したのだった。

ロサナは、オイレイに股を拡げさせ、自分もベッドに上って、彼の身体の上にかがみ、両手を彼の尻の上で円を描くよう動かしていたが、「やっかいな、太った女性の悪魔が出ようと思うのに出られなくて、肛門の途中でつまってあばれている。それで痛むのです」と診断を下す。それから、この苦痛を取り除くのが私の義務だ、という、彼女は気味の悪い声で呪文を唱え、最後に‘HAAA !!!’という大きな声を上げると、人差指をオイレイの肛門に突込んだ。オイレイは悲鳴を上げ、ロサナの指から逃れようと、ベッドから跳び降りようとして、ドサと床に落ち、気絶する。ロサナは、落ちていて、「これで悪魔が口から出ました。間もなく気がつくでしょう」と言って部屋を出てゆく。しかし、ハミルトン医師は、直ぐ自分の診察靴を取ってきて、オイレイの瞳孔を調べ、脈を取り、注射をすると、彼を寝台に寝かし、衣類のすそを整えた。それからマカリタに、鎮痛剤を渡し、「これで痛みはやわらぐでしょう。しかし、ご主人は痔の手術をした方がいい」と警告する。

目を醒したオイレイは、ロサナが指を突き差した肛門に灼けるような激しい痛みを覚える。ハミルトン医師が置いて行った鎮痛剤を服用したオイレイはやがて眠るが、寝小便をしたような感じがして、あわてて起きると、パンツもシートも血に染っていて驚く。出血には膿が混っている。

このような状態でも病院には行かないと決めているのは、看護婦に尻を見られるのが嫌だという理由だけではなかった。ティポタ国の財政は逼迫していて、総合病院は、緊急に必要な医療器具も薬剤も購入できず、あそこは病院でなく、死体置場だ、という悪評が立つほどになっていたし、オイレイにとって決定的となったのはある痔の手術を受けた患者が、手術の失敗のため、完全に失禁状態になってしまった、という新聞記事であった。

かくして、オイレイは国中の名声の高い治療者の許を訪ね歩いたが、はかばかしい結果は得られなかった。

ある日、タクシーの運転手をしている友人のブルブル (Bulbul) が、ヨガの大家で賢者の誉れの高いバブ・ヴィヴカナンド (Babu Vivekanand) を連れてくる。バブは、オイレイの問題は、肛門を軽視し、汚いもの、人前から隠すべきものと思っているところにある、という。そして、人体の各部位はすべて平等だ、肛門も眼や胸と同じように讃美されなければならない、と説く。バブは、それが思想だけのものではないことを、ヨガの実践で示すために、床に膝をつく、オイレイの股を拡げ、尻を顔を当てたかと思うと、肛門に接吻した。オイレイは感動し、バブの思想に共鳴したこと、そして、ヨガを始めることを告げる。

マカリタに、オイレイがヨガの哲学を語り、下品な言葉は一切使わず、大真面目に彼女の肛門に接吻しようとした時、彼女は驚きと恐怖のあまり失神してしまう。彼女はオイレイが精神に異状を来たしたのではないかと心配して、診療所の所長代理で精神科医のジークムント・ベンジャミン・ツィムマー博士に相談に行く。オイレイは、バブの「自分の肛門から始めて隣人の肛門に接吻せよ」という教えを早速実践しようとしたのであった。

ツィムマー医師は、マカリタの話の聴いて大変興味を示し、会ってみたい、ということになり、しめし合わせてオイレイに眠り薬を飲ませ、彼が眠っている間に診療所へ運び込む。目を醒したオイレイは医者の前に坐っていることを知って驚くが、彼は滔々と宇宙哲学を語り、「すべては肛門の端から始まるのです」と、珍説を大真面目に説く。あきれかえったティムマー医師は「エディプス・コンプレックスの疑いがある」と診断する。オイレイは怒って出で行く。

この間にもオイレイの症状は悪化するばかりで、出血はするし、もうまともには坐ることができず、古タイヤの上に腰を下ろすことで、かろうじて我慢しているのであった。メイト医師は、手術をしなければ駄目だ、しかし、総合病院には十分な設備がないので、海外の病院に行くべきだ、という。治療師たちの謝礼にお金を使ってしまったオイレイにはそれは無理な話だったのだが、ここに至ってはじめてニュージーランドの駐ティポタ高等弁務官事務所に、ニュージーランドでの治療の申請をすることをブルブルが思いつく。申請には総合病院の医師の診断書と意見書、地区議会の代表の証明書が必要だったが、それらはメイト医師とプカト巡査が作成し、オイレイの申請書に添えて、ブルブルがクルティ市の高等弁務官事務所に届けに行くことになる。これが承認されたら、無料で治療が受けられるだけでなく、オークランドまでの往復旅費も支給されるのである。

今か今から待つうちに、やっと返事が来て、オイレイは、村中の人々の盛大な見送りを受けて空路ニュージーランドへ出発する。オークランド国際空港に着くとオイレイはまっすぐダン・ミハカ・メモリアル病院 (Dun Mihaka Memorial Hospital) へ連れて行かれる。担当医は若

いアルバート・フレイザー (Albert Fraser) 医師であった。問診で、オイレイが経験した治療者たちの話は2時間に及んだが、フレイザー医師は魅せられたように耳を傾けていた。しかし、いざ実際に診察した彼は、「これはとても修復不可能だ」と叫ぶ。肛門全体を取り換える方法しかない。フレイザー医師は看護婦にメモを渡し、スピア・パート保存室へ代りの肛門を取りに行かせ、その間にオイレイの肛門を巧みに切除した。看護婦が持って帰った瓶の液体の中で、脈を搏ち、くらげの様に泳いでいるスピアの肛門を詳細に調べていた医師は顔を真っ赤にして、「これは白人女性の肛門だよ。私ははっきりポリネシア人男性のものを指定した筈だ」と、看護婦に取り換えてこい、と命じるが、彼女は、「ポリネシア人の肛門の保存はないのです」と答える。ここで少々の珍問答のあと、あきらめたフレイザー医師は白人女性の肛門の縫合を始める。そのときオイレイの尻がもち上り、大きな尻を放ったので縫いかけのスピアの肛門が天井まで飛ぶという事件が起こる。医師は呆然とするばかりである。天井から落ちてくる肛門を看護婦は上手に受け止める。もう一度縫合を始めたところ、拒絶反応は前よりも激しかったので、スピアの縫合はあきらめて、患者の肛門を元に戻すことにしたが、それは、すでに汚物入れに捨てられ死んでしまっていて役に立たず、医師が絶望していると、看護婦が「患者を、生きたスピアの肛門と一緒に、特別診療所へ送りましょう。あそこならスピアを固定できるかもしれません。私達が送った患者は、ほとんどあそこで治っています」という。後は君にまかすよ、といって医師が去った後、二人の看護士がオイレイの寝台車をエレベータに乗せ、地階に運んで行く。そして、彼等はいくつもの廊下を通って、「ワッカポハーネ診療所 ('The Whakapohane Clinic')」と大きな字で表札のかかっているところに到着した。

オイレイが麻酔から醒めると、バブの顔がにっこり笑っているのを見て驚く。首をめぐらしてみるとマカリタ、ブルブル、ロサナ、マラマをはじめ、ハミルトン医師やツィムマーマン医師に加えて、ティポタ国の保健大臣まで居た。彼等は皆バブの弟子になっていた。オイレイが身体の位置を変えようとする、「まだ動いてはいけない。治療の最終段階にはいったばかりだから」とバブが叫ぶ。オイレイに少しずつ分ってきたことは、オイレイが特別診療所に運ばれてきたとき、運よくバブがいて、彼はなんとかスピアの肛門を縫い付け、拒絶反応を起こして飛び出さないよう24時間以上も鼻を当てがって押えつけていたが、一人ではいつまでも続けられないので、彼に弟子入りした、第3千年運動のメンバーを呼び集めたのだった。

オイレイが静かにしていると、音楽が始まり、マカリタとブルブルとブカト巡査を除いて、すべての人々が踊り歌った。男も女も皆丸裸だった。音楽が終ると、ロサナを先頭に、そしてバブをしんがり、全員がオイレイの後ろで一列に並んだ。「前にかがんで！息を吸って！息を吐いて！鼻を当てがって！」とバブが静かな声で号令をかけた。オイレイは尻にロサナの顔が

押しつけられるのを感じた。

人間救済における西洋近代医学の限界についての認識と、伝統的な治療のなかでも、バブが説く一種の生命哲学に基づく治療法は合理的であると判断したダン・ミハカ・メモリアル病院の理事会がバブが主宰する国際伝統医学専門学校にワカポハネ診療所を寄贈したのである。

帰りの機上で、窓から一点の雲もない空を眺めながら、オイレイは、自分の肛門ほど多くの試験や試練の対象になったものはないな、と思った。そして、ぼんやり、バブの第3千年運動の活動や、太平洋哲学について考えていると、Kiss my arse!「私の肛門に接吻せよ」という声が聞えてくるのであった。

III

『尻に接吻』は、南太平洋の島嶼国の社会と住民の現状を素材として、西洋文学の技法による料理法で見事に調理された「ごった煮」である。この小説の作者は、直喩、暗喩、引照、提喩、換喩は言うまでもなく、皮肉、あてこすり、誇張法、冗語、警句、軽口、大風呂敷、罵詈雑言、方言、道化の哄笑など、あらゆる表現法を駆使する。

道化は、西欧の宮廷文化にも伝統があり、王侯に仕えて、おもしろおかしく、時には辛辣に、警世家として、あるいは人間性についての批評家として、一定の制約のもとではあるが自由に発言することを許されていた。シェイクスピア劇における道化 (Fool) はその典型である。そして、西欧の文学作品には、D. H. ロレンスの『息子と恋人』におけるパーキンのような道化的人物が一つの性格として存在が認められているのである。

さて、本来の道化の真骨頂は、己れは常に冷静で、どのような深刻な事態をも笑い飛ばし、人々に平衡感覚を取り戻させることである。道化は世界中のすべての文化に存在するが、南太平洋の島々では、昔から演技としての道化が社会に浸透している。南太平洋には、世俗的な道化と儀礼的な道化があるが、前者は自発的なもので、何かのお祝いや儀式に人々が集った時に即興的に演じられるものである。このような道化の典型は宴会の余興であって、宴もたけなわな頃合いに、芸達者が跳り出て、滑稽な仕草で踊ったり、物まねをしたり、いちゃついたりして、皆んなを大笑いの渦に巻き込むという道化役を演じるのである。

これに対して、儀礼的な道化は、何んらかの儀式の中で演じられるもので、もともと宗教的儀式の枠組みの中で語られ、演じられたものであるが、キリスト教の普及とともに次第にその活力と存在理由を失っていったが、南太平洋の人々はそれでもその文化を大切に守ってきた。現在儀礼的な道化として行われているのは、自発的な道化ではなく、いわば玄人の道化役が、例えば、結婚の披露宴などで鞘間として重要な役割を果たすのである。道化は、身近な問類や社

会的な問題を滑稽な仕草で演じてみせる。道化には身分の高い人の癖などを誇張して真似てみせたり、その言動をひやかしたりする特権が与えられている。道化は権威あるもの言葉を茶化したり、皮肉ったりして笑いの対象とするのである。⁴⁾

『尻に接吻』の作者ハウオフアは、自分のことを、笑うのが大好きな道化、と評している。実際、いかにもトンガ人らしい堂々たる体軀のハウオフアは口が悪い。彼の話は、しばしば真面目な話なのか、冗談なのか、皮肉なのかわからなくて対話者は困惑する。そして、ポカンとしている相手を見てハウオフアは大笑いする。⁵⁾

ハウオフアは、その小説第一作『タイコ島人の物語』(*Tales of the Tikongs*, 1983) で、南太平洋の小さな島の、独立国家となっても植民地根生の抜けない住民の弱さや奇行や、旧宗主国やその他の援助国まかせの財政の実情などを、面白おかしく小説仕立てで語ってきかせるのであるが、そこには道化の演技を彷彿させるものがある。

第二作『尻に接吻』は、作者自身が体験した痔の苦痛とその治療をめぐる数々のトラブルを、南太平洋の道化的性格オイレイ・ボンボキを主人公とする一種の諷刺小説として描き出した。諷刺の対象は南太平におけるコロニアリズムとネオ・コロニアリズムである。

次に、『尻に接吻』におけるハウオフアの技法を具体的に解明してゆこう。

1. 作品の主題と構成

この小説の主題は肛門である。始めから終わりまで肛門をめぐる話である。「肛門」のことは、登場人物は皆卑語の‘arse’を使っていて、オイレイがこれから‘anus’と言うことにする、と云った時、妻が、一体どうなったんだろう、と気味悪るがる。医者も‘arse’と言ってしまったから、あわてて‘anus’と言い直す場面などがあって面白い。⁶⁾ 初めにも述べたように、表題には誇張法、あるいは、婉曲法により「下の端」を意味する‘neder-end’なる語が造られ、‘Kisses in the Nederends’となっているが、小説は‘Kiss my arse!’という一行で終わっている。(上品ぶるのは止めよう。結局これがわれわれの身についた言葉なのだ!というメッセージが込められている。)

肛門が人体にある穴の一つという、極めて非情な記述がされるエピソードがある。⁷⁾ オイレイは痔の激痛にさいなまれ、うめきながら、妻や友人にやつ当りをして、かろうじて耐えているのであるが、次から次へと、さまざまな民間治療者の治療を受けるうち、肛門の状態は悪くなるばかりで、遂にニュージーランドの病院で手術を受ける頃には、ぼろぼろになっていて手のほどこしようもなく、オイレイの肛門は切除され、スベアの白人女性の肛門が縫合される(ポリネシア男性の肛門の臓器の提供は無いのだ)ことになる。外科医が叫ぶ。“Shit oh shit!…”

Well, I suppose we'll have to make do with what we've got, won't we? But it's utterly crazy. Fancy a black man walking around with a white feminist arsehole, Jeesus!⁸⁾"

拒絶反応が強すぎて、外科医が縫合をあきらめた後を受けて、バブは縫合してからずっと鼻で押え続けて、遂に定着させることに成功する。バブの信徒たちも協力して、ヨガの踊りをおどり歌をうたって、順番に鼻で肛門を押え続けたのであった。

His arse had been preached at, prayed upon, exorcised, breathed into and out of, sung and danced. It had been exploded, jobbed, blown, hummed, needled, steamed, smoked, carved, discarded, transplanted, race-trans-formed, sex-changed, nosed and kissed back to life. No human arse had been subjected to so many trials and tribulations. No human orifice had gone through hell to emerge in the end so strong, so healthy and so wise. He and his lowliest organ had been called upon to the great task of saving humanity from its headlong rush toward the Apocalypse, and ushering in a new millenium or lasting peace…⁹⁾

帰国する機上のオイレイはこんなことを思うのであった。バブはかつてオイレイに、

'All parts of human body are of equal value … It is only when you are able to lovingly and respectfully kiss your own anus, and those of your fellow human beings, that you will know you have purified yourself of all obscenities and prejudices, and have overcome your worst fears and phobias. You will then be able to see with utmost clarity the true nature of beauty, which is the essence of the unity and equality of all things … Eternity begins and ends in the anus.'

と語った。¹⁰⁾この小説の思想はここに表わされていると考えてよからう。

エベリ・ハウオフアは、肛門を主題とする小説を構想していて、肛門の地位をいかにして上げるか、肛門を讃美する歌をいかにうたうかを思案する彼の頭に皮肉な考えが浮んだ。発想の逆転である。終りは始まりなのだ。肛門は入口なのだ。ハウオフアは彼の小説のエピグラフとして T. S. エリオットの『四つの四重奏』の最後の四重奏「リトル・ギディング」(Little Gidding) の第 5 楽章からの詩句を引用した。

What we call the beginning is often the end
 And to make an end is to make a beginning.
 The end is where we start from ...

• • •
 • • •

We shall not cease from exploration
 And the end of all our exploring
 Will be to arrive where we started
 And know the place for the first time.¹¹⁾

ハウオファは、この小説を T.S.エリオットの永劫回帰思想の模倣作（パロディ）として構成することを思いついたのである。しかし、扱う主題は肛門だ。それにふさわしい文体として作者が採用したのは‘serio-comic style’といわれる、軽妙な、芯は真面目なのだが、滑稽な感じを与える、文体であった。（この項続く）

注

- 1) 安川显「南太平洋の道化の文学——エペリ・ハウオファの『タイコ島人の物語』について——『東西学術研究所紀要』第31輯。関西大学東西学術研究所 1998, 参照。
- 2) Editor's Note, *Kisses in the Nederends*. University of Hawai'i Press 1995, ix.
- 3) *Ditto*.
- 4) 'Pacific Clowning' by Vilsoni Hereniko, an appendix to *Last Virgin in Paradise* by Vilsoni Hereniko and Teresia Teaiwa. Mana Publications 1993 参照。
- 5) 筆者は Epeli Hau'ofa 教授に二度お会いした。第1回目は1994年の8月～9月に開催されたハワイのイースト・ウェスト・センターとハワイ大学のセミナーと学会で、もう一度は1996年の6月フィジーの南太平洋大学で。
- 6) *Kisses*, P. 144.
- 7) *Ibid*, P. 153.
- 8) *Ibid*, pp. 146-7.
- 9) *Ibid*, PP. 152-3.
- 10) *Ibid*, P.100.
- 11) *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. Faber and Faber 1969, P. 197.

参考書目

- Benson, Eugene & Conolly, L. W. (eds) *Encyclopedia of Post Colonial Literatures in English*, 2vols. London & New York: Routledge 1994.
- Hau'ofa, Epeli *The Tales of the Tikongs*. First published by Longman Paul 1983. Published by Penguin Books 1988. Published by Beake House 1993. Published by University of Hawai'i Press 1994.
- Hereniko, Vilsoni, *Woven Gods: Female Clowns and Power in Rotuma*. Honolulu: University of

- Hawai'i Press 1995.
- 'Pacific Clowning', an appendix to *Last Virgin in Paradise: a serious comedy*. Suva: Mana Publications 1993.
- Pollard, Arthur. *Satire*. (The Critical Idiom General Editor: John D. Jump). London: Methuen & Co Ltd 1970.
- Sherrad, Paul (ed.) *Readings in Pacific Literature*. Wollongong, Australia: University of Wollongong, 1993.
- Subramani. *South Pacific Literature: From Myth to Fabulation*. Revised Edition, Suva: Institute of Pacific Studies of the University of the South Pacific 1992
- Wendt, Albert (ed.) *Nuanua: Pacific Writing in English Since 1980*. Honolulu: University of Hawai'i Press 1995.
- 鈴木善三『イギリス諷刺文学の系譜』東京：研究社出版 1996.
- バフチン, ミハイル 川端香男里訳『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネサンスの民衆文化』東京：せりか書房 1974.
- 望月哲男・鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』（ちくま学芸文庫）：東京：筑摩書房 1995, 2001 第7刷。
- 安川昱「アジア・太平洋の新しい英語文学の研究(1)太平洋の新しい英語や文学の研究(1)——太平洋地域の英文学——（『英文学論集』第35号。関西大学英文学会 1995, pp. 100-114）」
- 「太平洋地域の英文学」橋本征治編『現代社会と環境・開発・文化』（関西大学東西学術研究所国際共同研究シリーズ 2 関西大学出版部 1998, pp. 309-328）」
- 「南太平洋の劇作家ヴィルソーニ・ヘレニコ——その人と作品について——」丹羽良治編『ポストコロニアル大学の研究』（関西大学東西学術研究所研究叢刊 16 関西大学出版部 2001, pp. 27~73）」